

旅情

Summer time

鑑賞日：2016・9・26

製作 1955年 米・英 カラー 上映時間 100分

監督 デヴィット・リーン

主演 キャサリン・ヘップバーン、ロッサノ・ブラッツィ

(あらすじ)

ジェーン（K・ヘップバーン）は休暇をもらい、秘書生活で貯めたお金でひとりあこがれのヴェネツィアにやってきた。周りはカップルばかりで、一人旅のジェーンはやはり寂しい。サン・マルコ広場のカフェで男性の視線を感じたが、彼女は立ち去る。翌日、入った骨董屋の主人がその男性で、レナード（ロッサノ・ブラッツィ）だった。彼女はレナードに夜のヴェネツィアを案内してもらい、旅の素晴らしさに酔いしれた。レナードに恋をしたジェーンは翌日美容院に行き、着飾って約束の広場に出かけたが、レナードは来ずに、店の若者がやってきた。父は用事でおそくなるという。こんな大きな子供がいるのかと思うと、彼女の夢はしぼんだが、後からホテルに追ってきたレナードは妻とは別居しているという。動揺する彼女に彼は愛し合うのに理屈はいらないと口説いた。二人は一夜を過ごす。数日が夢のように過ぎた。このままではもう別れられなくなると思ったジェーンは帰国を決意。思い出のヴェネツィアに別れを告げた。

(解説)

水の都ヴェネツィアを舞台に、中年にさしかかったアメリカ女性が、つかの間の恋に身を焦がすラブロマンスである。監督デヴィット・リーンは『ローマの休日』のようなおとぎ話でなく、生身の女性の大人の恋の切なさを描いた。

中年の女性の一人旅はわびしい。周りはカップルばかりなのに、ひとりぽつんとカフェに座っていても孤独感はつのるばかりである。その心の隙にレナードが入り込む。男に妻子があることを知ったジェーンは身を引こうとするが、心の飢えを言い当てられて、二人は結ばれる。夜空に輝く花火、口づけをしたジェーンの手から赤い靴が落ちる。ホテルのカーテンが揺れる。夜明けの人気のないサン・マルコ広場で手をつなぎ、そして寄り添う二人を遠景で撮ったシーンは忘れがたい。

キャサリン・ヘップバーンは当時48歳で中年の主人公を演じた。ヘップバーンは『勝利の朝』（1932）『招かれざる客』（1963）『冬のライオン』（1968）『黄昏』（1981）と4回のアカデミー主演女優賞を得ており、その記録はまだ破られていない大女優である。米国映画協会（A F I）が1999年に選出した「米国で最も偉大な女優50名中第1位だった」。2003年6月、96歳老衰のため死去した。

この映画ほど、ヴェネツィアを美しく撮影した映画はないといわれているが、これはデヴィット・リーンの詩的な感覚と、名カメラマン、ジャック・ヒルデヤードの功績である。このコンビは1957年『戦場にかける橋』を生んだ。